

お 名 前	性 別	満年齢	終戦時の年齢	現 住 所
の ざわ やすとら 野沢 安虎	男 性	8 9 歳 H27.8.15 現在	1 9 歳	日 吉

「教師が見た終戦前後の国民学校」

私は新城農蚕学校を昭和18年に卒業し、19年1月から富岡国民学校へ代用教員（準訓導）として勤めることになりました。当時の校長は、橋本 豊 先生でした。昭和20年の4月から5年生を担当し、終戦直後の昭和20年の10月31日まで1年10ヶ月勤務しましたが、通勤が大変だったことや家からの要請もあって、農業に専念するために退職しました。ちょうど終戦前後で、一番混乱した時期の学校を見たことになります。

○ 学校に軍隊が 宿 泊

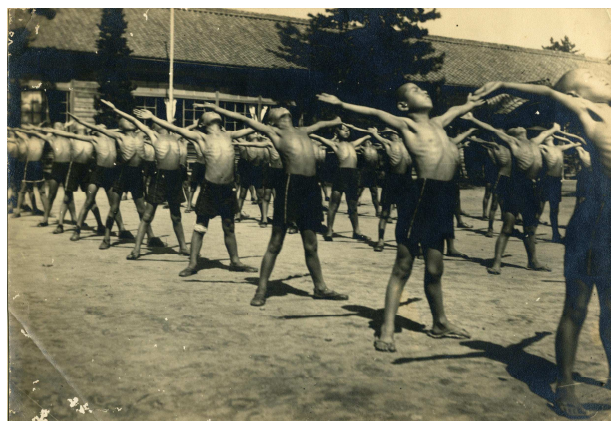
昭和20年になると、本土防衛のために怒部隊という軍隊が富岡国民学校や洞雲寺に入りました。富岡国民学校の講堂や裏校舎は兵舎として使われるようになり、教室が手狭になりました。担任した5年生は、10人が疎開してきたこともあって、65人になりました。それでも、一つの教室にすし詰めになって入りました。（この学年は、昭和21年には男女別の2クラスになります）軍人さんは、およそ100名ぐらいいたと思います。

下士官の軍人さんたちが職員室によく入ってきました。戦況のことも話されましたが、もちろん日本の戦況が不利だとは決して言いませんでした。

○ 勉強どころではなかった

昭和19年頃から、勉強よりも食糧増産のための勤労作業や教練が多くなりました。水田は吉祥山に近い方にあり、7畝ほどの広さの田で米作りに励みました。畑は、現在のライスセンターの近くにありました。昭和20年には運動場の大部分を開墾し、サツマイモを栽培しました。開墾は高等科の生徒が中心で、私たちは苗を挿しましたが、あまりたくさんは採れませんでした。

軍事教練はよくやりました。「鬼畜米英」を叫び、竹やり訓練や木刀で竹を立ててたたく練習もしました。アメリカ軍の上陸を想定してのことでした。わらで人形を作り、背の高いアメリカ兵を想定して下から上に向かって突かせるのです。アメリカ兵を竹やりで突くなんて、できるはずありませんが、当時は真剣その



戦時中の清水野国民学校の体操風景 八名小提供

ものでした。駐留^{ちゅうりゅう}している軍人さんが教えてくれることもありました。

また、この頃は兵隊送りや遺骨迎え^{いこつむか}があつたり空襲警報^{くうしゅうけいほう}があつたりで、教室に落ち着いていられることは少なく、勉強どころではありませんでした。

○ 「本当のことは教えるな」

昭和20年に入ると、次第に戦況が悪化してきましたが、「本当のことは教えるな^{ぎよくさい}」と校長先生から言われたこともありました。南方の島が玉砕したとか、航空母艦^{ぼかんしず}が沈められたとか、日本が苦戦している話は伝わってきており、戦況が悪くなってきたことは感じていました。兵隊さんからも情報^{じょうほう}は入りましたから、もう勝ち目はないのではないかと内心思っていました。東京や名古屋をはじめ^{はままつ}浜松や岡崎^{おかざき}が空襲される頃には、みんなそう思っていたと思います。しかし、そのことを口に出すことは決してありませんでした。

特に子どもの前では、軍事教育を徹底^{てつてい}することが絶対^{ぜつたい}でしたから、日本が不利になるようなことは決して言えませんでした。日本中に「鬼畜米英」「1億玉砕」のスローガンが広められていましたから。

○ 終戦の日のこと

玉音放送は、職員室のラジオで他の先生方や軍人さんといっしょに聞きました。よく聞き取れませんでした。敗戦だということは分かりました。私は信じがたい気持ちでしたが、一方ではやれやれというか、ほっとしたような気がしたのも事実です。軍人さんたちは、ぼう然としていたり、悔^{くや}し涙^{なみだ}にくれたりでさまざまでした。それでも、これから日本はアメリカに占領^{せんりょう}されてしまうのか、日本はどうなってしまうのかと、とても不安な気持ちでした。

○ 終戦直後の混乱

9月1日には始業式があり、校長先生から「日本が負けたこと。これから民主的で新しい日本をつくっていくこと。」といった話があつたように思います。よく覚えてはいません。大きく変わったことは、奉安殿^{ほうあんでん}に敬礼^{けいれい}をしないことや教鞭^{しん}がなくなったこと、そして教科書の墨ぬり^{すみ}があつたことです。それまでの教育がすべて間違いだったと教えるわけですから、本当に困りました。それまで熱心に「日本は神の国」であると戦時教育を熱心に指導^{しどう}してきた先生ほど戸惑^{とまど}ったはずです。特に橋本校長先生やベテランの先生ほど困惑^{こんわく}されたと思います。

私の場合は、新米の代用



昭和20年3月初等科卒業生
2列目左から3人目が野沢先生

教員として、上司の指示通りに指導してきましたし、戦後も同様でした。それでも、軍事教練などを厳しく指導してきたことも否定されるわけですから、本当に後ろめたいような気持ちになりました。

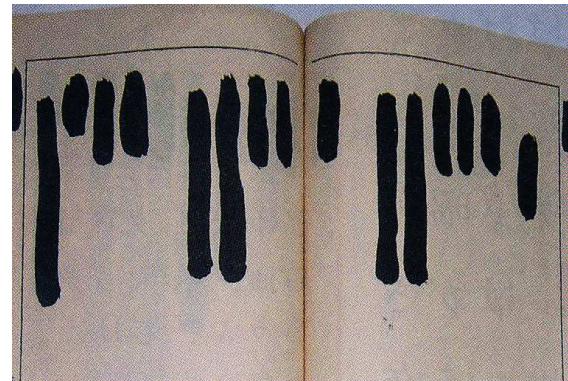
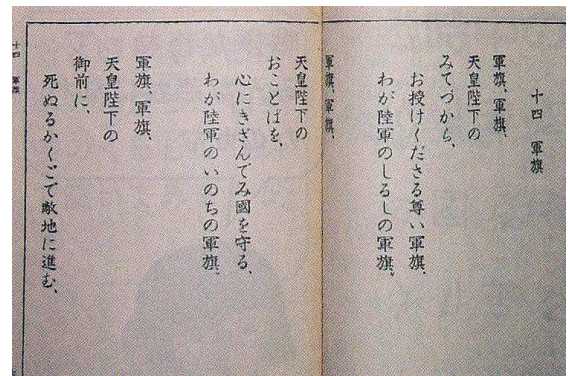
墨ぬりは校長先生からの指示があり、それに従って墨を塗らせました。軍国主義を一掃するため、どの教科書も戦争に関わる箇所はすべて墨で塗るように指示をしたと思います。それまで、子どもたちは教科書をととても大切に扱っていました。その教科書に墨をぬるわけですから、子どもたちは信じられない気持ちだったはずです。

戦争に負けるということは、教育方針も180度変わるんだということを痛切に感じさせられました。それまでの教育が根底から覆され、誤りばかり教えてきたことになるわけですから。GHQからの指示とはいえ、直接指導した私たちは罪悪感と無念さを痛切に感じましたし、子どもたちにとってはこれほど不幸なことはなかったと思います。

しかし、富岡の子どもたちは、教師不信になったり、教師を責めたり、困らせるようなことは全くありませんでした。「先生は嘘を教えていたんですか」「日本は神の国だから絶対負けなと言ったじゃないですか」と言われても仕方ないはずなのに……。終戦後も相変わらず教師の言うことは絶対で、礼儀をわきまえ、素直で、一生懸命働く子どもたちばかりでした。

私は時間の経過とともに、敗戦でよかった、民主主義に変わってよかったと思うようになりました。家の都合で10月31日で退職しましたが、ほっとしたというのがその時の気持ちです。そのまま全く逆の教育方針で子どもたちを教えていく自信はありませんでしたし、そんな力もありませんでしたから。戦前と戦後の教育を、頭を切り換えて指導することには大きな抵抗感やジレンマがあったはずで、それを乗り越えて民主教育に邁進された先生方には、大変なご苦労があったことと思っています。

戦争というのは、勝者が正義となり、敗戦国の制度や教育もすべて根底から変えてしまうものです。勝者がすべてを支配するのです。私たちのような戦争時代を体験することなく、今の日本の平和を守っていくためには、戦争に巻き込まれたり近づいたりするようなことは絶対に避けなければなりません。



墨ぬり教科書 わたしたちの村「つくで」より